

令和7年度 事業報告書

公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団

(はじめに)

令和7年度は、指定管理期間及び第Ⅲ期中期経営戦略計画の3年目として施設の堅実な管理運営に取り組むとともに、戦略項目ごとの目標達成に向け、着実に事業を企画・実施した。

特に美術館は、開館10周年という節目の年として、記念企画展をはじめとした、感性を刺激する多彩な事業を実施した。

その結果、開館以来過去最高となる80万人を超える来館者数を記録した。

(目 次)

I 県立美術館、iichiko 総合文化センターにおける「出会いと五感」をテーマにした芸術文化の拠点創造 . . . P1

I-1 ホール機能の優位性を活かした芸術性やオリジナリティの高い自主公演の開催と、利用者に親しまれる iichiko 総合文化センターづくり

- (1) センターの優れた特長を活かした公演や県民ニーズを捉えたバランの良い年間ラインナップの構築
- (2) 地元アーティストや県出身で全国的に活躍するアーティスト等と協働し、県内芸術レベルの向上に資する公演の実施
- (3) 全国に発信できる公演や地元芸術団体等への支援
- (4) 新たなファン層の拡大に資する普及啓発事業の充実

I-2 県民に親しまれる大分ならではの特色ある美術館づくり

- (1) 「五感で楽しむことができる」美術館、「出会いによる新たな発見と刺激のある」美術館をテーマにした新たな視点に基づく県民ニーズを捉えた展覧会の開催・誘致
- (2) 大分の歴史と文化や、所蔵品の魅力を紹介するコレクション展の開催
- (3) 文化観光の推進
- (4) 地域が芸術文化に触れる機会の提供（地域巡回展等の実施）
- (5) 「公開承認施設」の承認と「登録博物館」の登録
- (6) アトリウムを中心に交流拠点としての多様な取組の推進

I-3 県民が支え、県民とともに成長する芸術文化の推進

- (1) 友の会の会員拡大に向けた特典提供やイベントの開催、各団体への働きかけ
- (2) 友の会会員や県民からのニーズのくみ上げ
- (3) ボランティアスタッフの確保・養成と活動の充実

I-4 広報戦略に立脚し、多様な媒体を活用した効果的・効率的な情報発信・ブランディング

- (1) 広報戦略に基づく効果的・効率的な広報の推進
- (2) 「芸術文化ゾーン」の魅力向上とブランディングを推進

II 芸術文化ゾーンを拠点とするネットワークづくりとアートを活用した新しい価値の創造

・・・P6

II-1 ネットワークの活用や様々な分野との連携・協働による芸術文化拠点としての機能強化

- (1) 芸術文化ゾーンを核とした関係団体や各地の芸術文化活動との連携、ネットワークづくり
- (2) センターと美術館が連携した共同企画の実施
- (3) ウェールズ国立博物館との友好交流
- (4) 全国、九州、県内の公立文化施設や博物館・美術館とのネットワークづくり
- (5) 地域が芸術文化に触れる機会の提供（地域巡回展等の実施）【再掲】
- (6) おおいた障がい者芸術文化支援センターの運営
- (7) 県内のスポーツ意識向上の取組

III 大分発のクリエイティブ人材の育成

・・・P7

III-1 芸術文化による次代を担う人材育成と芸術文化活動の発表・鑑賞機会の確保

- (1) 次代を担う創造的人材の育成に向け、教育機関と連携した総合的な芸術文化体験プログラムの構築・実施
- (2) 県立美術館コレクションの教育普及活動への活用
- (3) 小学生等のセンター、美術館への来館促進
- (4) ジュニアオーケストラによる人材育成の取り組み
- (5) センター・美術館における県民や地元アーティストの発表機会の確保

IV 外国人住民等が安心して暮らし、働き、学べるための生活支援・コミュニケーション支援や県民の国際交流の促進等を通じた多文化共生の推進

・・・P8

IV-1 多文化共生の推進に向けた国際交流プラザの機能強化

- (1) 県民・外国人住民等に広く開放された国際交流の拠点づくり
- (2) 大分県外国人総合相談センターの運営等による外国人住民等の生活支援
- (3) 日本語教育の充実等によるコミュニケーション支援
- (4) 災害時等の外国人住民等に対する地域の支援体制づくりの促進
- (5) 国際交流団体への支援とネットワーク化の推進

V 利用者の視点に立った安全で快適な施設管理と財団経営基盤の強化

・・・P10

V-1 安全・快適で効率的な施設の維持・管理

- (1) 安全・快適で効率的な施設運営・維持管理
- (2) 施設全体の一体的・効率的な運営
- (3) 貸館による施設利用の促進と利用者満足度の向上

- (4) 防災・危機管理
- (5) 感染症対策の徹底

V-2 財団経営基盤の強化・安定化

- (1) 体系的な人材育成、人事評価システムの確立
- (2) 「働き方改革」に対応した労働環境整備
- (3) 財務基盤の強化・安定化
- (4) 経営の適正化と効率化に向けた取組み
- (5) ネーミングライツによるパートナーシップ業務の実施

VI サービス改善提案事業

・・・P12

- (1) サービス改善提案事業

I 県立美術館、iichiko 総合文化センターにおける「出会いと五感」をテーマにした芸術文化の拠点創造

I-1 ホール機能の優位性を活かした芸術性やオリジナリティの高い自主公演の開催と、利用者に親しまれる iichiko 総合文化センターづくり

(1) センターの優れた特長を活かした公演や県民ニーズを捉えたバランスの良い年間ラインナップの構築

広く奥行きのある大ホールの三面舞台と優れた音響の特徴を活かし、これまでも、オーケストラ、バレエ、オペラ、室内楽など多様なジャンルの公演を実施してきた。

東京バレエ団の公演は、若い世代の入場者比率が高く近隣県から来場するなど好評を博し、令和3年度開催に続き満席となった。ダンス公演「オバケッタ」は、美術館の「ザ・キャビンカンパニー大絵本美術展」に合わせ開催したことで、入場者数の増加や両館の連携深化に繋がった。

今までセンターに来たことがない方々や各世代層にアプローチするために実施した九州交響楽団による交響組曲「ドラゴンクエストⅢ」の公演や、人気声優による「天正遣欧少年使節 in メタバース」は SNS で話題が広がるなど、センターの認知度向上にも寄与した。

(2) 地元アーティストや県出身で全国的に活躍するアーティスト等と協働し、県内芸術レベルの向上に資する公演の実施

「おんがくのアーティスト・イン・レジデンス」事業として、県出身で全国的に活躍する若手音楽家たちが、県内で活動する大分の若手音楽家たちと協働して公開リハーサルやジュニアオーケストラの指導、他のホールでのアウトリーチ活動を行い、県内の音楽レベルの向上に取り組んだ。

(3) 全国に発信できる公演や地元芸術団体等への支援

東京バレエ団やピアニスト反田恭平氏を招聘し全国に発信できる質の高い公演を実施したほか、「第25回別府アルゲリッチ音楽祭」や「日本フィルハーモニー交響楽団九州公演」を共催し支援した。また、アルメイダ生誕500周年を記念した音楽劇「語りと音楽でつづる宣教医アルメイダ」を制作・上演し大分県の歴史と文化を広く発信した。

(4) 芸術文化の拠点施設としての取組

「大分民俗芸能まつり」を開催し、神楽や杖踊りなどの県内各地の伝統芸能を紹介した。また、地域の物産を展示販売するコーナーを設置し祭りを演出した。

コロナ禍を契機に希薄化していた県内市町の公立文化施設や教育委員会との連携回復に向け、当センターが企画制作する公演や地域交流プログラムの協働開催を通じて、各機関との関係性を再構築し、連携の基盤づくりを進めた。

(5) 新たなファン層の拡大に資する普及啓発事業の充実

0歳から参加可能な未就学児鑑賞サポートコンサートを開催した。おむつ替えや授乳スペースを新設するなど家族全員が参加しやすい環境づくりに努めた。

手話通訳、要約筆記、字幕など、障害の有無にかかわらず舞台芸術を堪能でき

る「新・感・覚コンサート」を実施した。そのほか、小中学校、公民館等に出向きクラシック音楽の魅力を生演奏で提供するアウトリーチ活動を展開した。

I-2 県民に親しまれる大分ならではの特色ある美術館づくり

(1) 「五感で楽しむことができる」美術館、「出会いによる新たな発見と刺激のある」美術館をテーマにした新たな視点に基づく県民ニーズを捉えた展覧会の開催・誘致

開館10周年を迎える節目の年として、感性を刺激する魅力ある企画展を年間を通じて幅広いジャンルから企画・開催した。

4月26日の開館10周年記念式典の開催にあわせスタートした記念企画展「LINKSー大分と、世界と。」は、「大分と世界をつなぐ」をテーマに、全国各地の美術館から貴重な作品を借用し、本県でしか見ることのできない展示を展開。会期中はピカソの「ゲルニカ（タペストリー）」を大分で初公開するなど、新たな視点で大分の美術を発信し、最終入場者数は34,202人となった。

夏には、家族連れが楽しめる展覧会を開催。地元メディアと共同の実行委員会形式の「チームラボ 学ぶ！未来の遊園地と、花と共に生きる動物たち」は、体験型のデジタルアート作品による展覧会で、入場者数10万人を突破した。また同時期に、大正ロマンを代表する竹久夢二の「生誕140年 YUMEJI展 大正浪漫と新しい世界」を開催することで、夏休み期間中、幅広い世代の美術館訪問を促進した。

11月からは、10周年記念企画展「きらめく日本美術 1300年の至宝展」を開催。中央の文化との交流の中で、独自に発展した大分の古美術の全貌を紹介した。

年明けの1月からは、スタジオジブリの作品をテーマにした「金曜ロードショーとジブリ展」を開催。スタジオジブリ作品が公開された当時の時代背景を振り返るとともに、その映画の世界に入り込めるような展示を展開した。県外からも多くのお客様が訪れ、最終入場者数は199,337人と、開館以来の展覧会最高入場者数記録を達成した。

以上のとおり、伝統的な美術からデジタルアート、アニメーションまで多彩なジャンルの展覧会を開催することにより、企画展の入場者数は、前年度を大きく上回り、過去最高の365,182人となった。

また本年度の美術館来館者数は、目標の500,000人を大きく超える823,536人となり、開館以来過去最高を記録した。

(2) 大分の歴史と文化や、所蔵品の魅力を紹介するコレクション展の開催

①所蔵作品の展示

当館が所蔵する多彩な作品の鑑賞機会を広く県民に提供するため、コレクション展Ⅰ(8月～11月)及びコレクション展Ⅱ(1月～3月)の2期にわたり開催した。いずれの会期も「特集展示」を行い、コレクションに新しい視点を加えた。コレクション展Ⅰでは、竹工芸を取り上げ、人間国宝岐部笙芳の作品等を紹介、コレクション展Ⅱでは、ピカソやシャガールの作品等を展示する「ボンジュール！フランス絵画とともに」、また大分ゆかりの工芸品にスポットをあてた「小鹿田の世界」を紹介した。

また、コレクション展Ⅰの期間中、「竹会 OITA BAMBOO ART 2025」(10月～11月)を3階ホワイエにおいて開催。竹で作られた楽器によるコンサートや

竹かごづくりのワークショップなど関連イベントを実施した。

②所蔵作品の管理

県の所蔵作品を財産台帳及び情報システムのデータベースにより適正に管理し、展示・保存環境維持のため、収蔵庫、展示室等の空調管理、記録を徹底した。

地震や火災への備えとして免震装置や防火シャッターの定期点検を行い、万全の安全確保を講じた。

③美術品収集

県が進める美術品収集事業について、専門的な観点から必要な調査等を連携して実施した。（令和7年度実績：寄贈13点、寄託14点）

④美術品の調査及び研究

美術・工芸、保存修復、教育普及に関する研究調査を県と連携して実施。その成果を収集活動やコレクション展の企画に活用するとともに職員の資質向上に繋げた。また、各種展覧会ごとに図録を作成。学芸員としての専門知識をフルに発揮し来場者に想いを届けた。その他、「年報」や「紀要」も編集。専門家だけではなく広く美術館の取り組みを知ってもらえるようホームページにて公開した。

（3）文化観光の推進

令和3～7年度「県立美術館を中核とした大分県文化観光推進拠点計画」の最終年として、計画に基づき竹工芸に係る知識等の継承や調査・研究、特集展示等を実施した。具体的には、コレクション展Ⅰにおける「人間国宝岐部笙芳」の特集展示や、「竹会 OITA BAMBOO ART 2025」の開催を通じて、地域の特色を活かした竹工芸文化の発信に取り組んだ。

また、大型宿泊施設との連携による新たな魅力発信として、ホテル日航大分オアシスタワーや、杉乃井ホテルと連携し、「チームラボ展」及び「金曜ロードショーとジブリ展」の観覧チケット付宿泊プランやランチプランを販売、ホテルでのワークショップ開催等、文化観光の推進と県外からの集客強化に取り組んだ。

「金曜ロードショーとジブリ展」では県外からの来館者が多く、本展覧会に合わせて県内観光を楽しむ来館者も多く見られたことから、文化観光拠点としての機能を発揮した。

（4）地域が芸術文化に触れる機会の提供（地域巡回展等の実施）

日田市のパトリア日田を会場に当館所蔵の収蔵品を展示した「地域美術館@パトリア日田『ヨーロッパ美術紀行大分県立美術館コレクション』」を開催。期間中、学芸員のギャラリートークに加え、館長講演会も開催し、普段美術館に足を運ぶ機会の少ない方に対し、美術を楽しむ機会を提供した。また、日田市内の小学生を対象に招待事業を展開。「地域へ出向く」「作品をみてもらう」を両立し、県民の鑑賞機会の拡大に努めた。

あわせて大分空港での収蔵作品展示も継続に実施。広くアートに触れることのできる仕組みづくりを推進した。

（5）「公開承認施設」の承認と「登録博物館」の登録

文化財保護法に基づく「公開承認施設」の承認取得に向け、計画どおり、人員配置や環境データの準備を進めた。国立文化財機構文化財活用センターの保存環境調査等の支援・指導の下、館内環境データの精査・改善を継続的に進め、令和

7年9月に承認された。

博物館法に基づく「登録博物館」については、令和6年3月に登録が完了している。

(6) アトリウムを中心に交流拠点としての多様な取組の推進

①アトリウム等の活用

「そうぞう（創造、想像、騒々）」のキャッチフレーズのもと、子どもやファミリーをはじめ幅広い世代の方々が気軽に集まれる空間として、多彩なイベントを、年間を通して開催した。

ゴールデンウィーク期間中には、ぶんぶん号特別運行、明和電機コンサート、OPAMコンサート、アトリエミュージアムキッチンカー、等を開催した。夏休み期間中には、ポストカードづくり、紙芝居公演、駄菓子屋くるる等を開催し、家族連れの来館者が多数訪れた。年末年始には、クッキーチャーム作り、鉄道模型展示、日替わりワークショップ、書初め体験、バックヤードツアー等を開催した。また、建築の視点から当館の魅力を伝える「美術館バックヤードツアー」を毎月第一日曜日に定例開催。

これらの取組により、計画に掲げた「OPAMへ行けばいつでも新鮮な楽しみがある」イメージの定着を図った。

また、木育玩具、絵本、塗り絵などが楽しめるキッズスペースを常設し、気軽に来館できる環境づくりに努めた。

②情報コーナー

美術に関連する約4,000冊の蔵書を最大限に活用し、企画展のテーマや季節に合わせて書籍を入れ替えた。

③ミュージアムショップ

開館10周年に合わせ、収蔵品をモチーフにしたオリジナルグッズを順次展開した。第一弾として、収蔵作品3点をパッケージデザインとした「ミネラルウォーター」を4月から販売。1月からは、キャビンカンパニーデザインのオリジナルパッケージのお菓子缶に大分銘菓を詰め合わせた「OLA！OPAM」の販売を開始するとともに、3月には収蔵品を用いたオリジナルトレーディングカードの販売を開始した。

また、企画展に合わせて販売する商品を大幅に入れ替えることで来館者のニーズに対応。展覧会との一体的な運営にも寄与した。

④ミュージアムカフェ

開館10周年に合わせ、スイーツメニュー「10周年シャリテプレート」を年間通じて提供したほか、各種企画展と連動する形で期間限定メニューを提供し好評を得た。また、夏休み期間中には県の支援により、「ハーモニーランドコラボカフェ」を実施。サンリオキャラクターを使った内外装、10種類のオリジナルメニューを提供し、子どもから大人まで幅広い世代が楽しめる空間を演出。

I-3 県民が支え、県民とともに成長する芸術文化の推進

- (1) 友の会の会員拡大に向けた特典提供やイベントの開催、各団体への働きかけ
センターと美術館を中心とした芸術文化ゾーンを応援してくれる「大分県芸術文

化友の会びび」の個人会員、法人会員を幅広く募集し、個人・団体営業の推進等により新規加入増に努めた。新規加入増に向けた取り組みとして、大分県庁1階に友の会びび入会特設ブースを設置し、会員特典のPRを行うことで、さらなる会員の獲得を図った。

社会人向けに音楽とメディアの関係や欧州音楽家の功績等に関する芸術文化教養講座を計2回開催した。

＊友の会 有料会員数（令和7年度末時点）

①個人会員 4,827人

（KOTOBUKI 619人、TAKASAGO 3,105人、UME266人、学生837人）

②法人会員 67法人

（2）友の会会員や県民からのニーズのくみ上げ

県民とともに成長する芸術文化ゾーンを実現するため、アンケートなどにより会員・非会員ともに広く意見を募集した。

（3）ボランティアスタッフの確保・養成と活動の充実

芸術文化ゾーンを支えるボランティアスタッフ（emoスタッフ、OPAMサポーター）を引き続き確保・養成した。emoスタッフは、任期2年の2年目にあたり、53名が登録し延べ648名が活動した。あらゆる世代の来場者や場面を想定した基本研修を行うとともに、6年度に実施した合理的配慮研修を活かし、車いす利用者への対応に当たった。

OPAMサポーターについては、任期2年の初年度にあたることから、コレクション展や施設ガイド、教育普及活動についての研修を実施した。毎月定期的に活動を行い美術館の魅力発信の大きな力となった。

I-4 広報戦略に立脚し、多様な媒体を活用した効果的効率的な情報発信・ブランディング

（1）広報戦略に基づく効果的・効率的な広報の推進

総合情報誌、財団ホームページ、SNS、メールマガジンなどの自主広報媒体を通じた広報を積極的に行った。

こうした取り組みにより、美術館の公式Instagramのフォロワー数は21,000人を超え、多くの方が来館するきっかけとなった。

センター大型モニターの活用や動画配信、さらに若年層のファン獲得のためのSNS広告などを実施するとともに、大分空港のフォトフレームなどを活用し集客施設での広報を充実した。

自主広報に加え、新聞広告をはじめ、テレビやラジオへの情報提供などマスコミへの積極的な広報活動に努め、多くのパブリシティ獲得につなげた。

（2）「芸術文化ゾーン」の魅力向上とブランディングを推進

集客施設である大分駅からセンター・美術館までの動線において、中央町商店街、竹町商店街に設置するモニターやビジョンで企画展の広報を行った。

Ⅱ 芸術文化ゾーンを拠点とするネットワークづくりとアートを活用した新しい価値の創造

Ⅱ－１ ネットワークの活用や様々な分野との連携・協働による芸術文化拠点としての機能強化

(1) 芸術文化ゾーンを核とした関係団体や各地の芸術文化活動との連携、ネットワークづくり

芸術文化団体などが iichiko アトリウムプラザや美術館アトリウムなどを活用して行うアートイベント等を促進し、賑わいあふれる空間づくりを進めた。

大分市の歩行者天国と連携した催しとして、「まちなか散策クイズラリー」を実施し、センターと美術館を中心とした賑い創出に寄与した。

3月には国際女性デーに合わせ、女性活躍の現状と今後を考えるイベントとして、県やサンリオエンターテイメント等と連携し、「映画『女性の休日』上映×トークセッション」を音の泉ホールで開催した。

(2) センターと美術館が連携した共同企画の実施

美術館アトリウムでのジュニアオーケストラや企画展等に合わせたセンターの登録アウトリーチアーティストによる演奏会を実施し、美術と音楽を併せて楽しむ芸術の豊かな味わい方を提供した。

(3) ウェールズ国立博物館との友好交流

令和7年1月15日にウェールズ国立博物館との新たな覚書(MOU)を締結したことを受け、計画に基づき、引き続き両館の学芸員による情報交換等の交流を継続した。令和7年が「日本におけるウェールズ年」に当たることを踏まえ、11月には、「ウェールズ・アート・ウィーク」を開催し、ウェールズのテキスタイルアーティストのリオ氏らをはじめ、ウェールズゆかりの作品や文化を紹介する関連企画を展開した。また、期間中、ウェールズアーティストと大分の竹工芸作家の交流を深めるとともに、九州交響楽団弦楽四重奏団によるアトリウムコンサートや、駐日英国大使館公邸シェフを招いた「アフタヌーンティー・パーティー」を開催し、両地域の文化交流を一層深める機会となった。

(4) 全国、九州、県内の公立文化施設や博物館・美術館とのネットワークづくり

6月4日、5日には、iichiko 音の泉ホール等を会場に「第5回全国美術館会議定時社員総会」を開催。ホスト館として全国から美術館館長、学芸員等約300名を迎え、開催中の「LINKSー大分」の鑑賞や意見交換等を実施した。

その他、全国公立文化施設協会や日本博物館協会並びに各九州支部の会員としての活動を通じて、計画に基づき、他県とのネットワークづくりに取り組んだ。

(5) 地域が芸術文化に触れる機会の提供（地域巡回展等の実施）【再掲】

日田市のパトリア日田を会場に当館所蔵の収蔵品を展示した「地域美術館@パトリア日田『ヨーロッパ美術紀行大分県立美術館コレクション』」を開催。期間中、学芸員のギャラリートークに加え、館長講演会も開催し、普段美術館に足を運ぶ機会の少ない方に美術を楽しむ機会を提供した。また、日田市内の

小学生を対象に招待事業を展開。「地域へ出向く」「作品をみてもらう」を両立し、県民の鑑賞機会の拡大に努めた。

あわせて大分空港での収蔵作品展示も継続に実施。広くアートに触れることのできる仕組みづくりを推進した。

(6) おおいた障がい者芸術文化支援センターの運営

「おおいた障がい者芸術文化支援センター」の運營業務を県から受託し、「相談支援」や「創造・発表・鑑賞機会の提供」、「人材育成」等の事業を県と連携して実施した。

相談業務では、施設や福祉事業所から「利用者が描いた作品をTシャツのデザインに二次利用したい」、「作品集を作りたい」等、作品に付加価値をつける方法など多様な相談が寄せられ、センターのネットワークを活用したアドバイスや援助を行うことができた。

また、美術館で11月に開催した「おおいた障がい者芸術文化支援センター企画展 vol.7 はばたくつばさ」では、過去最高数となる5,504人の来場があり、障がいのある方の芸術文化活動への理解を深めることができた。

(7) 県内のスポーツ意識向上の取組

県と連携し大分スポーツ公園の広告看板の誘致業務を実施した。

Ⅲ 大分発のクリエイティブ人材の育成

Ⅲ－1 芸術文化による次代を担う人材育成と芸術文化活動の発表・鑑賞機会の確保

(1) 次代を担う創造的人材の育成に向け、教育機関と連携した総合的な芸術文化体験プログラムの構築・実施

芸術文化を活用した感性・創造力を育む教育やSTEAM教育を推進するため、音楽・美術の体験プログラムを教育機関等と連携しながら構築・実施した。

センターでは、チェロやピアノ、チェンバロ、声楽、管楽器、邦楽などの演奏家を小中学校等に派遣し、芸術家によるクラシック音楽の生の演奏の美しさを鑑賞し身近で体験してもらうアウトリーチ活動を39回実施した。計2,294名（内児童生徒計1,667名）にアーティストの演奏を届けた。

美術館では、STEAMの考え方を取り入れたアトリエでのワークショップを年間通じて継続実施。学校に出向いてワークショップを行うなどのアウトリーチ活動も積極的に実施した。また、子供たちを指導する先生向けのワークショップや研修・講座を並行して実施した。

(2) 県立美術館コレクションの教育普及活動への活用

スクールプログラム「びじゅつかんの旅」や教育委員会と連携して実施した「小4ミュージアムツアー」において、学芸員と一緒にコレクション展を鑑賞した。様々な視点から作品の楽しみ方を案内することで郷土への愛着と誇りを育んだ。

(3) 小学生等のセンター、美術館への来館促進

小学生等がセンター、美術館に来館し、本物の舞台公演や美術品を鑑賞することを通じて豊かな感性を育み、新たな気づきや発見を生み出す機会を提供するため、教育機関等と連携しながら招待事業等の来館促進施策を推進した。

センターは、遠方となる大分市・別府市以外の市町村の小学生とその保護者を主催公演に無料招待するとともに、中学生までを対象とした親子招待も実施した。(11公演に計600名(うち小中学生316名))

美術館では、幼稚園児を対象にアウトリーチ活動と美術館での鑑賞体験を組み合わせた「びじゅつかんの旅・旅じたく」を実施。また、県教育委員会が例年実施している小学4年生ツアーに加え、10周年記念展覧会への小学3年生、幼稚園児等の招待を実施するなど、計画に掲げた取組を着実に展開し、より多くの学校や児童生徒の来館促進につなげた。

(4) ジュニアオーケストラによる人材育成の取り組み

結成17年目で第17回目となる定期演奏会は、指揮者に清水醒輝先生、卒団生4名(ヴァイオリン)を迎え、ヴィヴァルディ/四季、ムソルグスキー/禿山の一夜、ベートーベン/運命の3曲を演奏し、来場者から高い評価を得た。来場者は1,009名であった。

8月には北部九州4県のジュニアオーケストラと交流し研鑽を積んだ。

また、楽器初心者で本団員を目指すアカデミーコースを通年で設定してレッスンを実施、入団に向けて取り組んだ。

そのほか、ジュニアオーケストラを広く知ってもらい、楽器体験やオーケストラ演奏を体験するワークショップ型のイベントを8月に実施し勧誘を行った。

(5) センター、美術館における県民や地元アーティストの発表機会の確保

美術館の企画展に合わせ、地元で活動するアーティスト(センターのアウトリーチ演奏家等)によるミニコンサートを美術館アトリウムで8回実施し、発表の場を提供した。

IV 外国人住民等が安心して暮らし、働き、学べるための生活支援・コミュニケーション支援や県民の国際交流の促進等を通じた多文化共生の推進

IV-1 多文化共生の推進に向けた国際交流プラザの機能強化

(1) 県民・外国人住民等に広く開放された国際交流の拠点づくり

おおいた国際交流プラザで、外国人のための各種情報を収集・提供するとともに、閲覧・貸出のための新聞、雑誌、外国語図書等を収集・配架、図書の無料配布等を行い、県民や在住外国人の国際理解と国際交流の促進に努めた。

また、毎週金曜日に県国際交流員による英語及び韓国語、中国語の「FREE TALK CLASS」を実施したほか、インドネシア語、ベトナム語、イタリア語の登録ボランティアによる「語学講座」を開催した。

さらに、県国際交流員等による「国際理解講座」を通じて、モンゴル(内モンゴル自治区を含む)、韓国、ポルトガル、英国の文化、歴史、自然などを紹介した。

（２）大分県外国人総合相談センターの運営等による外国人住民等の生活支援

大分県外国人総合相談センターの運営を県から受託し、在住外国人や関係者を対象に、生活、就労及び在留資格等の多言語相談を実施した。職員による相談対応のほか、法律専門家相談、外国語相談（中国語、タガログ語）を実施し、年間で 370 件の相談に対応した。

また、「大分県外国人総合相談センター／おおいた国際交流プラザ」の広報誌を季刊（年 4 回）で発行するとともに、ホームページやフェイスブックの運用、多言語でメール配信するなど、多様な情報発信を行った。

（３）日本語教育の充実等によるコミュニケーション支援

地域における日本語教育の充実に向け、日本語教室の学習支援者を確保・育成するため、初任者を対象とした「日本語教室・日本語ボランティア研修（初級編）」と、現に学習指導に従事している支援者等を対象とした「同研修（スキルアップ編）」及び「同研修（上級編）」を開催するとともに、日本語教室で学習している外国人等が学習成果を発表する「日本語おしゃべり会」を開催した。

また、県内の日本語教室関係者の連携を図るため「日本語教室ネットワーク会議」を 2 回開催したほか、日本語教室空白地域における教室開設を支援するため日本語教育総括コーディネーターを派遣した。

さらに、通訳・翻訳ボランティアや日本語ボランティアの募集・登録を行うとともに、登録ボランティアを活用して、県民と在住外国人等とのコミュニケーション支援を行った。

（４）災害時等の外国人住民等に対する地域の支援体制づくりの促進

近年多発する大規模災害に備え、災害時の外国人支援をテーマに県や市町村の行政職員を対象としたセミナーと、防災士や地域で外国人を支援するボランティア等を対象としたセミナーをそれぞれ開催した。

防災士、日本語ボランティア等を対象としたセミナーでは、令和 8 年 5 月に変更される気象庁の防災気象情報や気象庁の多言語ホームページの活用などについて確認した。

（５）国際交流団体への支援とネットワーク化の推進

県内で活動する国際交流団体間の連携を図り、外国人住民が生き生き暮らせる地域づくりにつなげるため、「おおいた国際交流団体ネットワーク会議」を開催した。会議では、県の多文化共生モデル事業を実施している 2 つの国際交流団体の事例発表や、県内 5 つの外国人相談センターの活動状況の報告等を行った。

また、国際交流団体等が行う交流活動等の活性化のため、「国際交流団体等活動活性化補助事業」により、留学生と地域住民等の交流活動や日中の芸術文化交流活動を支援した。

V 利用者の視点に立った安全で快適な施設管理と財団経営基盤の強化

V-1 安全・快適で効率的な施設の維持・管理

(1) 安全・快適で効率的な施設運営・維持管理

①共通事項

- ・施設の適正な利用及び利用者への便宜供与に関する業務
施設等の利用料金は、知事の承認を受けて適正な金額に定め、施設の公平・平等かつ適正な利用が行われるよう便宜供与に努めた。また、積極的な広報活動により、施設の利用促進を図った。
- ・駐車場の管理運営
利用者が、事故なく安全・安心に駐車場を利用できるよう、常駐警備員を配置するなどして、適切な管理運営を行うとともに、センターと美術館の駐車場警備を併せて業務委託することで、互いの満空車情報を共有し、状況に応じて車両を円滑に誘導できる体制を継続した。
- ・新施設予約システムの活用
更新により、ネット予約やクレジット支払いが可能となった施設貸出の予約システムを活用し、お客さまの利便性向上を図った。
- ・キャッシュレス化の推進
広報誌、HP掲載やSNSによる情報発信などを通じて、施設貸出や駐車場利用料金のキャッシュレス化定着を図った。

②個別事項：センター

- ・施設及び設備の維持管理に関する業務
的確な保守点検により、施設、設備の正常な性能を維持するとともに、県との協力体制のなかで計画的に更新を行っており、令和7年度は中ホール電気室高圧遮断器更新をはじめ、中ホール女子トイレ排水管漏水修繕、県電気室バッテリー等更新、空調設備の更新及び昇降機更新のための設計等を行った。
- ・備品等の維持管理業務
備品台帳により適切に管理した。
- ・植栽等の維持管理業務
ホール、アトリウムに配置した自然木について、灌水、施肥、剪定、枯葉撤去等により、適正に管理を行った。
- ・清掃業務
施設利用の快適さと美観の保全のため専門業者による清掃を行った。
- ・保安警備業務
県や防災センターと連携した保安体制により、施設内の秩序を維持し、利用者の安全を確保した。
- ・施設予約システムの活用
施設貸出予約システムの予約状況表示方法を改修し、問い合わせをしやすくすることで利用者の利便性の向上を図った。

③個別事項：美術館

- ・施設及び設備の維持管理に関する業務

定期的かつ的確な保守点検により施設・設備の正常な機能を維持するとともに、県との連携により、不具合箇所の確認を継続して行うことで、安定した展示環境、収蔵環境の確保に努めた。

- ・備品等の維持管理業務
備品台帳により、適切に管理した。
- ・植栽等の維持管理業務
美観維持のため、定期的な植栽等の管理を行った。
- ・清掃業務
美術館としての快適な空間、適切な収蔵環境や展示環境を保つため、高い仕様の清掃業務を行った。また、総合的有害生物管理（I P M=Integrated Pest Management）により、生物的防除、化学的防除、物理的防除等を徹底した。特に美術館管理を行う上で関係者全員の意識統一が必要となる I P Mについては、財団だけではなく、警備等の委託業者も含めて一体的な研修を実施した。
- ・保安警備業務
夜間の機械警備に加え、24時間常駐の警備員を配置することで、徹底した警備体制を整え、事故、盗難等を未然に防いだ。

（２）施設全体の一体的・効率的な運営

センターと美術館を一体的に管理することによるスケールメリットを最大限に発揮できるよう、総務管理事務の一元処理を行うとともに、警備、清掃、設備管理、インフォメーション業務等についてそれぞれ共通の専門業者に委託し、クオリティ・コストの両面でレベルの高い施設の一元管理を行った。特にセンターと美術館の情報共有と相互案内により両施設が一体となって施設全体のイメージアップと利用者の利便性の向上を図った。

（３）貸館による施設利用の促進と利用者満足度の向上

施設予約システムの適切な運用や円滑な窓口での受付対応により、お客さまにストレスのない利用申請業務を提供した。また、インターネットによる受付とクレジット決済について広報・周知することで貸館の利用拡大に繋げた。そのほか、施設利用者へのアンケート調査の実施など、利用者の意見や情報の分析に努め、施設の管理運営の改善を図った。

○個別事項：センター

予約の受付と貸館利用の促進に努め、ホール利用率87.1%を達成した。

○個別事項：美術館

展示室やアトリウムの貸館の営業活動、施設予約システムの周知、積極的な情報発信などで利用者を増やすよう努めた。

（４）防災・危機管理

年間を通じて、防災のための新人研修・図上訓練・防災訓練を実施した。また、センターでは複合施設管理者による合同訓練にも参加した。美術館については、警備員等を含め関係者一体となった防災訓練を実施した。また、併せてAEDの操作などを内容とする救命講習を実施し、実際に発症者が生じた際にも、慌てることなく対応し一命を取り留めるなど、来館者や職員の緊急時に対応できる能力の向上を図った。

V-2 財団経営基盤の強化・安定化

(1) 体系的な人材育成、人事評価システムの確立

財団主催の各種研修会のほか、大分県自治人材育成センターや民間など外部での研修会を活用して職員の職務職責に応じた能力を養成した。また、職員の業績評価及び能力評価からなる人事評価システムと職員面談に基づいて職員の適正な人事配置を行うとともに、業務内容に応じた効率的な組織づくりに努めた。

(2) 「働き方改革」と労働環境整備

衛生委員会の定期開催と定期健康診断による職員の健康管理を行うとともに、出退勤管理システムを活用した時間外勤務の縮減といった労務管理に取り組んだ。また、国や県などの動向を注視し、必要に応じて同一労働・同一賃金の面から給与の見直しを図った。

さらに、パソコンの更新に合わせ、ノートパソコン＋モニターへの切り替えや Microsoft 365 の導入などデジタル化の環境整備を進めるとともに、全職員を対象とした研修を実施し、業務の効率化と情報共有の高度化を図った。

(3) 財務基盤の強化・安定化

指定管理事業については、コロナ禍以降、施設利用料収入や駐車場収入などに影響を受ける財団経営を安定化するため、支出面の節減と効率的な予算執行に努めるとともに、収入面において利用料金の確保に努めた。

また、近年の人件費の高騰を受けて、職員人件費や、保守管理業者の委託料等の増加について、県と協議のうえ、指定管理費の増額を実現した。

自主事業については、基金の安定的な活用を図るとともに、チケット収入の増加に努めた。

また、関係団体と連携を密にすることで国や県からの補助金・助成金の獲得、さらには民間からの協賛金など外部資金の獲得に努めた。

(4) 経営の適正化と効率化に向けた取組み

適正かつ安全な経理事務を行うとともに、ネットワークシステム等利用したデータの共有や定期的な会議等を通じて、事業の費用対効果の検討、健全な経営の維持に取り組んだ。

(5) ネーミングライツによるパートナーシップ業務の実施

ネーミングライツのパートナー企業と財団が締結するパートナーシップ業務実施契約に基づいて、センターにおいて「iichiko」の愛称使用を徹底するとともに iichiko ポスターやグッズ等の掲示等を行い、PRを行った。

VI サービス改善提案事業

(1) サービス改善提案事業

センターではサービス改善提案事業として、遠方となる大分市・別府市以外の市町村の小学生とその保護者を主催公演に無料招待し（7 公演に計 216 名（うち小学生 124 名））次代を担う子どもたちの舞台芸術の鑑賞機会を提供した。